

「関東大震災と秋田県」

今朝は気温も25度以下となり、秋の気配を感じさせる爽やかな朝となりました。日中暑い日はまだしばらく続くでしょうが、季節は確かに秋へと進んでいることを感じさせます。

今日9月1日は防災の日です。県内でも防災訓練が各地で行われたことが報じられていますが、改めてところを引き締めて災害防止に努めたいものです。

さて、関東大震災が起こったのが1923年(大正12年)9月1日午前11時58分。マグニチュード(MG)7.9の巨大地震が相模トラフと呼ばれる海溝沿いのプレート境界で発生しました。ちなみに東日本大震災はMG9.0 阪神淡路大震災はMG7.3で、2011年の東日本大震災が起こるまでは過去最大の地震でした。総被害は死者・行方不明者10万5386人で多くは地震発生後に発生した火災による焼死で、被災住居は37万2657棟で、いずれも多くは東京市と横浜市に集中していました。

この大震災に秋田県はどうかかわったか、日赤病院からは救護看護婦36名が日暮里第59小学校に9月2日から10月5日まで罹災民の救護活動にあたっています。また地震発生翌日の9月2日内務次官から可能な限りの米の調達の依頼を受け、県では3日間で7,391俵を送付、その額10万円余り。さらに9月5日農商務省よりの依頼で応急用小屋掛け材料54,600石の材木、92,500枚杉皮を「複雑なる協議」の上9/7~20までに調達、10/1より輸送開始と記録にあります。さて、この義援物資購入資金をどうしたか、あらかじめ総額10万5000円と概算し、県官から高等官は給与の1割、その他給与の5分を強制的に義捐金として徴収しこれに充て、民間の募金も併せて最終的に総額37万5127円となったのです。

私はもちろん関東大震災の体験はないのですが、母は東京から約200キロ弱の上田高等女学校に当時通っており、その自伝的エッセイにはこう語っています。「昼食を始めた直後、グラッと揺れ始め、家中みな庭に出て庭木につかまりましたが、その木と一緒に揺れるのです。今まで経験したことのない大地震でした。そのうち東京、横浜方面が大変な被害だと伝わってきて、学校でもその話でもちきりでした。その日から生徒の3年4年は講堂に集められて、反物を裁切る級、縫う級、包装・発送する級に分かれて作業しました。そんな日が1週間も続きました。夜になると東の空が真っ赤でした。履物もなく煤で真っ黒になった被災者が汽車に溢れるように乗ってきてその混乱ぶりが想像できました」震災直後から東海道線、中央線とも不通となり、関西方面に向かう人が信越線に集中したとあり、乗り換えの篠ノ井駅では2週間で5万7400人にのぼったというのです。これらの記録は北原糸子著「関東大震災の社会学」(2011・朝日新聞出版)より引用しました。

このような大災害には流言飛語がつきものですが、特に朝鮮人や社会主義者の殺害は実にむごたらしく、記録を読むのも息苦しくなる思いです。吉村昭の「関東大震災」(文春文

庫)には、秋田県出身の戸差友次郎が足尾銅山から東京へ向かう途中農家に休ませてほしいことを頼んだ折、その言葉に妙な訛りがあり、朝鮮人と間違われて自警団に殺害されたという痛ましい事件が紹介されています。なんともやりきれない話ですが、現在でもこのようなことはなしとしません。新型コロナ感染に伴う根拠のない話がSNSによって拡散しています。また医療従事者に対するいわれなき偏見には怒りを覚えます。吉村昭は秋田人が殺害された事件を紹介した最後に、「責任の根源は政府、軍部、警察関係者にあったが、同時に騒擾を好む一部日本人の残虐性が悲惨な事件を続発させたのである」と述べています。プロシヤの宰相ビスマルクは「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」と述べていますが、関東大震災から最も学ぶべきは我らの内なる残忍性、このことかもしれません。

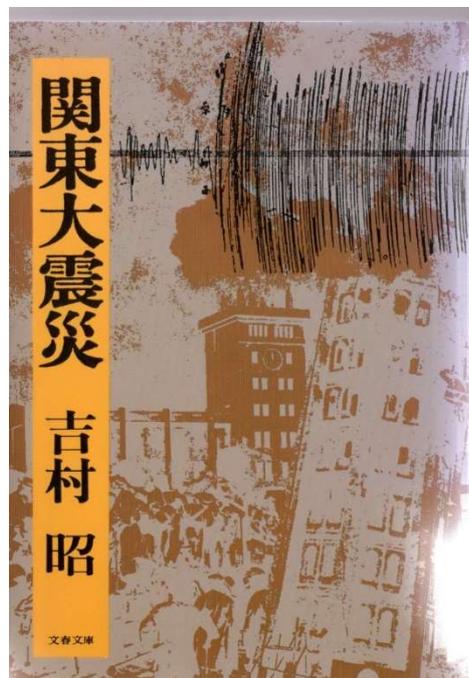
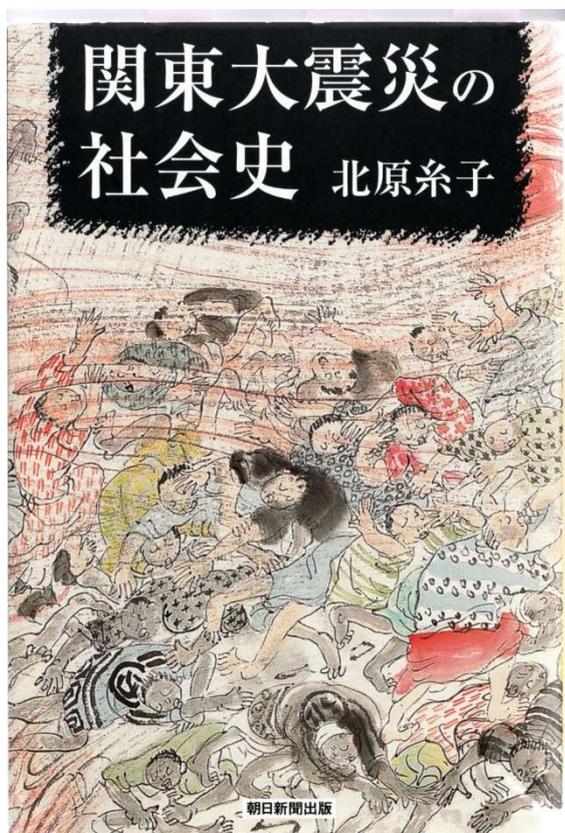
最後に角館出身のアララギ派の歌人平福百穂(当時46歳)が自身の体験を詠んだ短歌を紹介します。

大河をはさみうずまく火中(ほなか)にし生命たもちて一夜あけなむ

「いのちたもちて」という所に、緊迫感が伝わってきます。

さて、当山盛苑は水害に対しては比較的安全な立地にあることを先日お示ししましたが、災害はそれだけではなく、またこのところ夙に大型化しています。何かあったらどうしようと常に想像力を働かせて、入所者の皆さん、そして自分たちの命を守ってゆきましょう。

今月もよろしく願いいたします。



いずれも会議室の「職員図書書棚」にあります